

令和元年度

病害虫発生予察情報 第 20 号

長期予報

北海道病害虫防除所 令和 2 年 3 月 30 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区气象台発表の 2 月 25 日付の暖候期予報および 3 月 25 日付の 3 か月予報は以下のとおりです。

北海道地方 3 か月・暖候期予報

(4 月から 8 月までの天候見通し)

暖候期 令和 2 年 2 月 25 日

3 か月 令和 2 年 3 月 25 日

札幌管区气象台発表

< 気温の各階級の確率 (%) >

4 月	20	30	50
5 月	30	30	40
6 月	30	30	40
6～8 月	20	40	40

低い

平年並

高い

< 降水量の各階級の確率 (%) >

4 月	30	40	30
5 月	30	40	30
6 月	30	40	30
6～8 月	30	40	30

少ない

平年並

多い

春 (4 月) : 北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は、高い確率 50 % です。

(5 月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。

夏 (6 月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。

(6 月から 8 月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。
この期間の平均気温は、平年並または高い確率ともに 40 % です。

令和２年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎:やや多～多、□:並、△:やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の()は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		H27	H28	H29	H30	R1	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	並	並
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	並	並
	紋枯病	◎	◎	◎	□	△	並	並
	縞葉枯病	□	□	□	□	□	—	並
	ばか苗病	□	□	□	□	□	—	並
	苗立枯病	□	□	□	□	□	—	並
	種子伝染性細菌病	△	△	△	△	△	—	少
	ニカメイガ	△	△	△	△	△	—	少
	ヒメトビウンカ	□	◎	◎	□	◎	早	多
	イネドロオイムシ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	△	△	△	△	◎	やや早	やや多
	イネミギワバエ	◎	◎	□	◎	◎	やや早	並
	フタオビコヤガ	△	△	△	△	△	やや早	少
秋まき小麦	赤さび病	△	△	△	◎	◎	早	やや多
	うどんこ病	△	△	△	△	△	早	少
	眼紋病	△	△	△	△	△	—	少
	赤かび病	△	◎	△	◎	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	△	□	□	◎	△	—	並
	ムギキモグリバエ	△	△	△	△	◎	早	やや多
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	△	□	◎	◎	△	—	並
	ムギキモグリバエ	(△)	△	△	△	△	早	並
大豆	べと病	△	△	□	△	△	並	並
	わい化病	△	□	□	□	□	—	並
	マメシンクイガ	□	□	□	△	△	並	やや少
	食葉性鱗翅目幼虫	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	少
小豆	菌核病	△	□	□	△	△	並	並
	灰色かび病	△	□	◎	□	△	並	並
	茎疫病	△	△	□	□	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	△	△	□	□	△	やや早	やや少
菜豆	菌核病	△	□	□	△	□	並	並
	灰色かび病	△	□	△	△	△	並	並
	黄化病	□	□	□	△	△	—	少
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	少

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		H27	H28	H29	H30	R1	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	△	△	△	△	並	並
	軟腐病	□	◎	◎	◎	□	－	並
	黒あし病	□	◎	◎	□	□	－	並
	そうか病	□	△	△	△	□	－	並
	粉状そうか病	△	□	△	□	△	－	並
	アブラムシ類	◎	△	△	△	△	やや早	並
てんさい	褐斑病	△	□	△	△	△	並	並
	根腐病(黒根病含)	△	◎	△	△	△	－	並
	黄化病(旧 西部萎黄病)	(□)	(△)	(△)	△	△	－	並
	ヨトウガ (第1回)	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	ヨトウガ (第2回)	△	△	△	△	△	やや早	やや少
たまねぎ	白斑葉枯病	△	△	△	□	△	並	並
	軟腐病	△	◎	□	◎	△	－	並
	乾腐病	△	△	△	△	△	－	並
	ハエ類(タネキハエ、タネハエ)	△	△	△	△	◎	－	やや少
	ネギアザミウマ	◎	◎	△	△	◎	やや早	多
	ネギハモグリバエ	－	(△)	(△)	△	△	やや早	やや少
だいこん	軟腐病	□	◎	△	□	◎	－	並
	キスジトビハムシ	△	△	△	△	△	－	並
あぶらな科 野菜 ^{注3)}	コナガ	△	△	△	△	△	－	やや多
	ヨトウガ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
りんご	モニリア病	△	△	△	△	△	遅	少
	黒星病	◎	◎	◎	◎	◎	早	やや多
	斑点落葉病	◎	◎	◎	◎	◎	並	並
	腐らん病	◎	◎	◎	◎	◎	－	多
	ハマキムシ類	△	△	△	△	△	早	やや少
	モモシンクイガ	◎	△	△	△	△	やや早	やや少
	ハダニ類	△	△	△	△	◎	やや早	やや多
	キンモンホソガ	△	△	△	△	△	やや早	やや少

令和2年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻のヒメトビウンカ

ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を媒介し、ウイルス保毒虫率が高いほど、また、本種の発生量が多いほど、縞葉枯病の発生は多くなる。前年は各地で本種が多発し、越冬幼虫の密度が高いものと推察される。また、一部地域では保毒虫率が高い地点も認められていることから、縞葉枯病常発地域においてウンカ類に有効な箱施用剤を使用していない場合は、移植後から6月上旬に水面施用剤または茎葉散布剤での防除を実施する。本年は融雪が早く、春季の気温がやや高いと予報されており、第1回成虫の発生は早まるものと予想されたため、本田防除をおこなう場合は防除適期を逸しないよう注意する。なお、道内の広い範囲でMEP剤に対する抵抗性が確認されている。また、道外各地ではネオニコチノイド系およびフェニルピラゾール系薬剤に対する抵抗性が確認されていることから薬剤の選択に注意が必要である。

2. 水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメ

アカヒゲホソミドリカスミカメは出穂期頃に成虫が畦畔から本田に侵入し、成虫および幼虫が穂を加害して斑点米被害を生じさせる。高温少雨条件では、本田への侵入、増殖、加害が活発になる。本年は夏季の気温がやや高いと予報されているため、発生量および被害はやや多くなるものと予想される。薬剤防除にあたっては出穂期の基幹防除が重要であり、多発時は適切な散布間隔での追加防除が必要である。前年は春季から記録的な高温に経過して水稻の生育が早まったため、委託防除等において防除適期を逸した事例も報告された。春季から高温に経過して夏季に高温が予報された場合には、水稻の生育状況を踏まえ早めに防除日程の変更を検討する。

3. 小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照で多発しやすい。本年は4月の気温が平年より高く、降水量が平年並と予報されている。そのため、本病の発生に好適な条件となり初発時期が平年より早くなると予想される。5、6月の気温および降水量は平年並と予報されているが、近年主要品種の「きたほなみ」での発生が目立っていることから、発生量はやや多いと予想される。上位葉での発病後の防除では十分な効果が得られないため、多発が懸念される場合には、止葉抽出期までに薬剤散布を開始する。

4. 春まき小麦のムギキモグリバエ

ムギキモグリバエは、幼虫が小麦の茎内に侵入、加害する。生育初期の加害では無効分げつが増加し、出穂前の加害では白穂や傷穂被害となる。秋まき小麦に比べ春まき小麦で、特に種が遅い程被害が大きくなりやすい。前年は本種の発生量が多く、秋季も高温に経過したため越冬密度が高いと推測される。春まき小麦では早期は種に努め、6葉期頃までに茎葉散布を実施する。

5. たまねぎのネギアザミウマ

ネギアザミウマは、高温で早発・多発しやすく、少雨で多発が助長される。前年春季は記録的な高温少雨に経過したことで、本種が早発し、過去に例を見ない多発生となった。本種に対する薬剤防除は、適切な時期に開始すること、適切な防除間隔で効果の高い薬剤を使用することが重要である。本年は、夏季の気温がやや高いと予報されているため、発生量が多くなるものと予想される。たまねぎでは通常6月上旬以降に防除を開始するが、春季が高温に経過した場合は、防除開始時期を早める必要がある。また、ピレスロイド剤抵抗性系統が道内の広い範囲で確認されており、他系統薬剤に関しても連用多用は避け、ローテーション防除を徹底する。

6. あぶらな科野菜のコナガ

コナガは道内では越冬が困難なため、春季に道外から長距離飛来する。1月以降、全国的に高温が続いているため道外各地で多発が予想されており、既に平年より4～5半月早く密度上昇が認められている地域もある。4月も全国的に高温が予報されており、飛来源の増殖に好適な条件が続くものと推察される。このため、道内への春季の飛来量が平年より多くなるおそれがある。5～6月の気温は平年並であるが、夏季はやや高温と予報されているため、道内における多発が懸念される。防除にあたっては、近年ジアミド系薬剤抵抗性系統の飛来が確認されており、本系統薬剤の使用にあたっては防除効果の確認に努める。また、いずれの系統の薬剤においても連用多用は避け、抵抗性が発達することのないようにローテーション防除を徹底する。

7. りんごの黒星病

黒星病は前年の発病葉や発病枝から飛散する子のう胞子が一次伝染源となる。本年は4月の気温が平年より高いと予報されており、子のう胞子の飛散開始も早まり、初発時期も早まると予想される。また、春季および夏季の降水量は平年並と予報されているが、前年の発生量が多かったことから、一次伝染源の量が多いと推測され、発生量は平年よりやや多いと予想される。薬剤散布は、発病後からでは十分な効果が得られないため、予防的に、かつ散布ムラが生じないように十分な水量で実施する。また、道内でチオファネートメチルに対する耐性菌が発生している他、QoI剤に対する耐性菌やDMI剤に対する感受性低下菌の発生が確認されている地域もあるため、薬剤の選択に特に注意する。

8. りんごの腐らん病

腐らん病は発病部位から病原菌の胞子が分散し、感染源となる。近年発生が多い状況が続いており、感染源の除去対策が十分ではない園地もあると推察される。このような状況から本病の発生量は平年より多いと予想される。感染源を除去するために、発病部位を見つけ次第、削り取りや切り落としを行う。特に夏季になると発病部位が見つらなくなるため、早期から園地の観察に努める。削り取り等で出来た傷口が病原菌の侵入口となるため、薬剤を含んだ癒合剤を塗布する。また、休眠期防除も実施する。樹勢が弱ると感染しやすくなるため、樹勢を維持するために適切な栽培管理を行う。

9. りんごのハダニ類

前年は、後志および渡島地方などでハダニ類の発生が目立った。前年にリンゴハダニの発生が目立った地域、園地では、越冬卵密度が高まっている可能性が高いことから、休眠期のマシン油散布などによって越冬卵密度を低下させることが望ましい。4月は高温の予報であるため、りんごの生育およびリンゴハダニの越冬卵ふ化時期が早まることが予想される。また、夏季は気温がやや高いと予報されており、ハダニ類の発生はやや多くなるものと予想される。ナミハダニでは多くの系統の薬剤に対し抵抗性または感受性低下が確認されているため、夏季の薬剤散布にあたっては、同一系統剤の使用を年1回にとどめたローテーション防除を徹底し、散布ムラのないよう丁寧に散布する。